

痛々しかつたが、幸いなことに登山は続行できた。その後も落石は続いたが、何とか上部岩壁の中間部、我々が「すべり台」と名付けた雪壁に突入。負傷したばかりの青木がロープを延ばして進み、最後は馬目が最高のビバークポイントを発見して1日を締めくくった。標高はおよそ6100メートル。

ここまでを振り返ると、青木の落石だけは唯一のアクシデントではあつたが、順調そのものであった。懸案の赤壁帯は突破できだし、標高も6000メートルを超えた。すべり台上部のミックス壁も予想より傾斜はあるが問題はなさそう。ちょっと余裕が出たような気がしたので、調子に乗って貴重な1食分をデザートとして平らげた。本当の核心がここから始まるとは考えもしなかつた。

### シュガースノーのリツジ

4日目の壁は、昨日とはまるで違つて硬い岩となつた。快適なミックス壁にルートを延ばす。無風快晴。こんなに快適なクライミングがこの標高でできるなんて夢のようだ。6200メートル付近に目視できた最後の残置支点があつた。

しかし最後の最後で状況がガラリと変わつた。ある程度ロープが延びた地点から動きがない。ようやくコ



上・「すべり台」と名付けた雪壁を登る。  
下右・落石を受けた青木。  
下左・4回目のビバークに入る。

ールがきた時にはずいぶんと時間が経つていた。フォローして行ってみると、愕然とするような光景が広がっていた。恐竜の背中のようなシユガースノーのリツジ。これが頂上岩壁まで続いているではないか。

夕暮れが迫る中、危ういスノーリツジを削り、何とかテントを設営できるスペースを確保。どうやら昨日の楽勝ムードは取り消さなくてはならない。

複雑な心境で迎えた5日目。明るくなつてから改めて見てみると、この先いつたいどうやつてここから進むべきか……。トップを任せてもらったが問題はなさそう。ちょっと余裕

が出たような気がしたので、調子に乗って貴重な1食分をデザートとして平らげた。本当の核心がここから始まるとは考えもしなかつた。

### 覚悟を決めたこの先の3ピッチは、

生涯忘れることができないクライミングになつた。部分的にはあるが傾斜が70度から80度くらいの雪の壁。

どうやつたらこんな地形が生まれるのだろうか。もはやアックスのピッ

ーのヒマラヤ壁に突入。リツジの上は馬乗りでも進めない。ここで落ちるということは絶対に許されない。襲を越える時、雪に切れ目を入れてロープを引っ掛けた。このランナーが落下に耐えられるはずはないが、自分自身の心のプロテクションだ。

たっぷりと時間をかけて登つた末、冒頭に記した馬目の呼びかけが聞こえたのだつた。

リツジを突破した。ここを重荷でユマーリングするのは本当に大変だつた

と思う。3人のうち、誰か1人でもミ

スをしたら全滅するかもしれない。

そういう恐怖感があつた。

危ういきのこ雪の上で一夜を過ごす。標高6500メートル。ようやく明日は頂上に抜けられそうだ。

6日目の朝は鉛のような体の重たさを感じた。これまでで最も冷え込み、太陽が昇つても暖かくならない。

今日は頂上を越えて下降を始めなければ、体力的にも限界に近い。

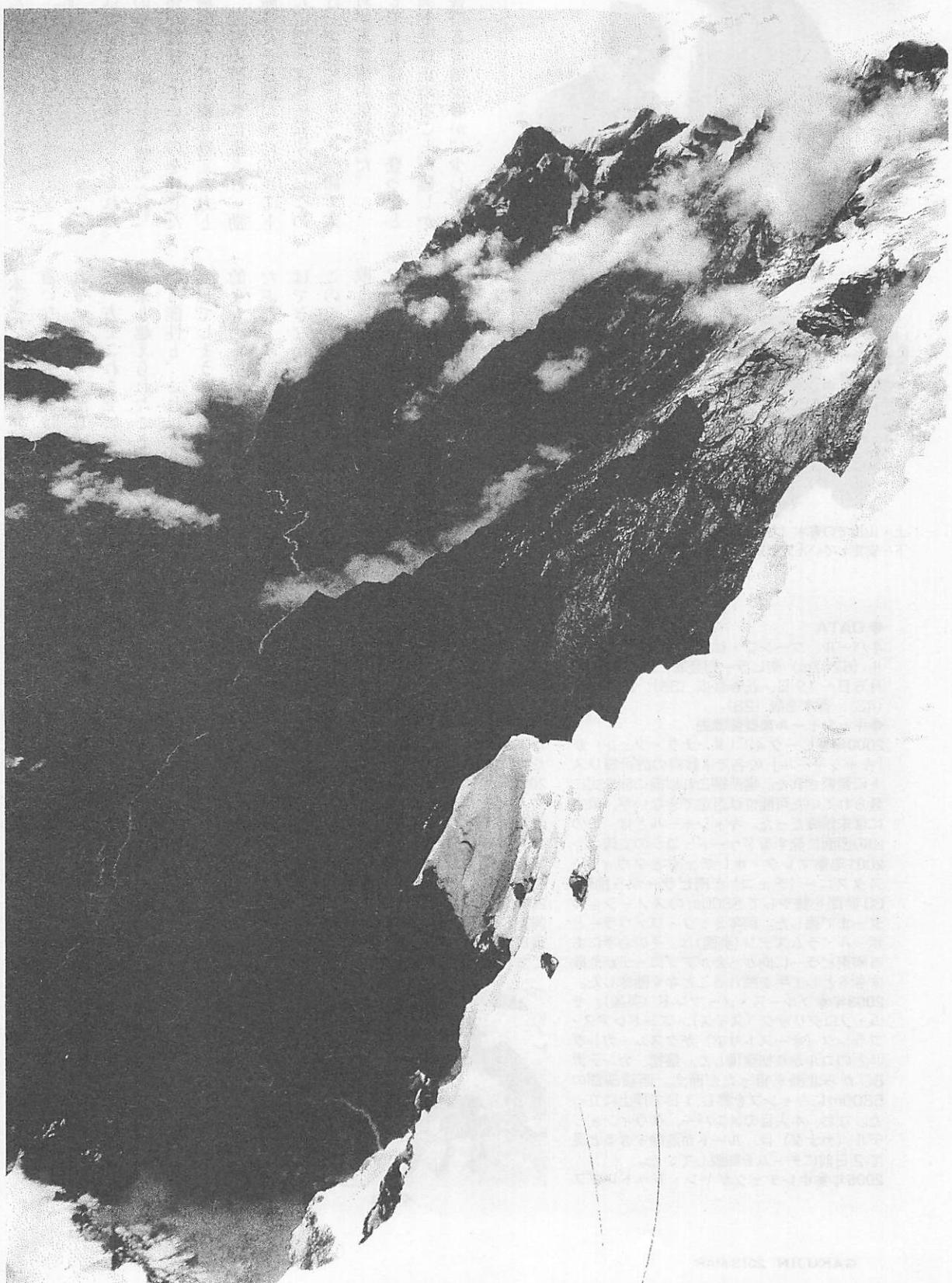
一番の弱点と判断した左上のライ

ンにルートを取る。馬目がトップで壁に取り付く。もはやスピードは上

がらないが、2ピッチを確実に登つた。しかしこれが終わらない。最後でとても硬い氷でできたセラック越えが残っていた。あまりの硬さに馬目が途中で力尽き、最後は青木が粘りのクライミングでようやく二

足歩行の世界に到達できた。

ヨロヨロと頂上に向かつて歩く。



5日目。雪の状態が不安定なヒマラヤ壁を登る。

なんともない歩きが果てしなく続く  
ように思えた。頂上はきのこ状の雪  
でできていた。登頂を喜ぶというよ  
り、もう登らなくてもいい安堵感の

ほうが大きかった。  
下降は真夜中まで続いた。最後は  
暗闇と疲労とが重なり、頂上から5  
00メートルほど下ったシュルントで眠れ

ぬ一夜を過ごした。すでにシュラフ  
は凍りつき、手指の爪はほとんど浮  
いてしまっている。

日目。顔はむくみ、体は思うように  
動かないがまだ心がしつかりしてい  
る。幸運なことに、西稜を試みてい  
たフランス隊のものと思われるトレ

ースに合流できた。途中で雪が降り出し、霧が濃くなつて手こずつたが、この日の深夜にはタンナに戻ることができた。

## 太陽に感謝

思えば毎日太陽が味方してくれた。テントの中が一瞬にして暖められ、凍えた体が弛緩していくのを感じた。そして過酷な1日を乗り越える力となつた。太陽の暖かさに癒され、励まされ続けた7日間だった。ルート名にした「The Nima Line」にこめた思いは、Nima（シエルバ語で太陽）に対する感謝の気持ちだ。

下山してもしばらくは、登つたという事実を受け止めることが難しかつた。喜びと安堵が静かに少しづつ

膨らんでいく感じだつた。帰途のキヤラバンが不安になるほど消耗していたけど、心は満ち足りていた。

「本当にあそこを登つたんだね」と言いながらも、実はまだ少し信じられない気持ちも混じついていた。

一方でこれまでにない過酷な登山を乗り越えられたことで感じた新しい可能性と、これ以上リミッターを外してしまうと危うい、という本能的なものを垣間見ることができた。たぶん、現時点ではこれ以上のことはできなかつただろう。しかし今回このラインに成功できたことは、失敗も成功も含めて、これまでコツコツと積み上げてきたものが実つた成果だと思う。愚直に山登りを続けてきてよかつた。



上・山頂での青木（左）、馬目。

下・安定していた天気が下降中に崩れてきた。

### ◆DATA

ネバール、クーンブ、ヒマール、キャシャール（6767m）南ピラー初登攀、2012年11月6日～12日、花谷泰広（36）、馬目弘仁（43）、青木達哉（28）。

### ◆キャシャール南壁挑戦史

2000年◎ピーク43（タンナグ・ツェン）が「キャシャール」の名でネ政府の許可峰リストに登載された。場所柄これ以前に非公式に登っていた可能性は否定できないが、公式には未踏峰だった。キャシャールとは、この山の西面に発するドゥード・コシの支流。

2001年◎マレク・ホレチェックとダヴィド・スタスニー（チェコ）が南ピラーから挑戦。60時間費やして5600mのスノーショルダーまで達した。同年ミック・ファウラーとポール・ラムズデン（英国）は、その右手にある南東ピラーに向かったがアプローチが危険すぎるとして手を触れることなく断念した。

2003年◎ブルース・ノーマンド（英国）、サム・プロデリック（スイス）、アンドレアス・フランク（オーストリア）がクスマム・カンガルとのコルから初登頂した。最初、カンテガBCから北面を狙ったが断念。西稜基部の5800mにキャンプを移し、1日で頂上に立つた。なお、4人目のメンバー、ケヴィン・リデル（カナダ）は、ルートが危険すぎると見て2日前にチームを離脱していた。

2005年◎ホレチェックがヤン・ドウドレブス

キーと2人で再挑戦。南ピラーではなく、右手の南西壁から西稜へと抜けるラインを探ったが6500m地点から下降した。

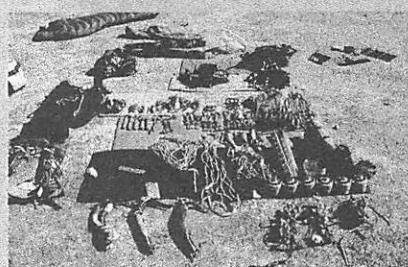
2008年◎ホレチェック3回目の挑戦は再びドウドレブスキーと行われた。南ピラーの南西側フランケをたどって（WI6、M7）ショルダーに達したものの、後者が足を故障したため引き返した。

2010年◎アンディ・ハウスマンとトニー・ストーン（英国）はホレチェックの南西側壁に氷が付いていなかったので、南ピラーを末端の岩稜から取り付き、HVS（5.8～5.9に相当）の岩登りを続けて5700mまで達した。今回日本トリオが完登したラインである。

2011年◎ハウスマンはニック・ブロック（英国）と再び入山したが、悪天候に妨げられて南ピラーに取り付けず、西稜に転じたものの、こちらも失敗に終わった。

山はクライマーの技量だけで登れるものではない。それは必要最低限身に付けておかなければならないことを。一緒に登る仲間との出会い、山と出会うタイミング、天候、体調……それらが一つでも欠けたらうまくいかない。そういう意味で今回は何一つ欠けるものがなかつたと思う。

\*この登山は日本山岳会の海外登山基金および信州大学山岳会の小川基金の補助をいただきました。多大なるご支援に感謝いたします。



全装備